

宇喜多氏から備前池田氏へ の展開

会員 井上秀男

① 周匝佐々部氏と安芸の佐々部氏の資料 について

私の故郷の赤磐市周匝に茶臼山城と呼ばれている山城がある。津山市から流れる吉井川と美作市林野から流れる吉野川との合流する場所である。標高 180m頂上に登ると周匝平野を南側に北側には飯岡地域を一望できる。月の輪古墳・美作後南朝9代良懐(よしやす)親王の墓(我王の墓)とも呼ばれている遺跡や、万葉歌人の平賀元義の開設した楯之舎塾の場所も見える。

この周匝の地は美作国と備前国を結び交通の要路であり、国境の要所であった。この城の築城時期は不明であるが、備陽記巻八に赤坂郡の内古城跡の中に見られ、また備前軍記の中に「赤坂郡周匝の城に佐々部勘齊籠城し……」と見られる。その他天神山記にも城主佐々部勘之丞父子……として文献資料にある。

この茶臼山城は天文2年(1533)に佐々部勘齊貞利が居城し天正7年(1579)に宇喜多直家に攻められて落城する。享禄5年(1532)に浦上宗景が和気郡の天神山に城を築いて勢力を拡張し備前東部や美作地方の有力な諸氏は浦上宗景に属する者が多かった。天文元年(1532)頃から出雲の尼子氏が美作方面に侵攻を始め天文13年(1544)と同22年美作西部への大侵攻があったが、浦上氏の勢力に制圧されて前進することが出来なかった。しかし、その浦上宗景も家臣であった宇喜多直家が勢力を強めてきて、天正3年(1575)9月和気郡の浦上宗景の居城の天神山城を攻めて落城させ、美作方面への侵攻が始まる。今まで浦上宗景の家臣や備前北部美作地方の有力諸氏は、美作の三星城主の後藤勝基を盟主にして宇喜多直家に抵抗する者もいた。

その中に周匝の茶臼山城の佐々部勘齊貞利がいた。宇喜多直家は天正7年(1579)2月に、美作へ侵攻する手始めとして、家臣の花房助兵衛職之・延原弾正景光、その他の諸氏によって侵攻し佐々部勢は敗れ落城する。佐々部勘齊貞利の墓地は茶臼山城の裾野に息子の仙千代の墓と一の谷と云う場所に葬られて居る。この佐々部氏の墓地に広島県(安芸国)から子孫の方が墓参りに来られている。

私は以前に、茶臼山城主の佐々部氏について調べたことがあり、その文献資料として『日本城郭全集』の広島県内城郭の中に、広島県高田郡高宮町佐々部に牛首城があつて、佐々部氏の居城で本丸、三の丸、居館などの七段からなる郭(くるわ)を有する山城があります。また、同郡高宮町佐々部に面山(めんざん)城があつて、佐々部氏の居城で丘陵上に八段の郭を有し山腹に居館があると記されている。

広島県高田郡に佐々部と云う地名があるので、この地域の有力な土豪として毛利との関係があつたと思われる。佐々部氏の関係文献として、『萩藩閥閥録』のなか(八十八)に毛利の家臣宍戸元源から佐々部兵部少輔祐賢に宛てた感状文で、内容は安芸国宮崎にて尼子詮久(あきひさ)と合戦して高名をあげたという文面であり、天文9年(1540)12月18日日付の書面、もう一点は備後国三谷郡高杉城切崩しの時に功労があつて、佐々部兵部少輔祐賢に宍戸安芸守隆家から宛てられた文書で、天文13年(1544)8月10日の日付があり、次に天正3年(1575)1月23日毛利勢は備中鬼身城(現総社市)を攻める。中島元行、三村親成を案内人として鬼身城を取り囲み、守っていた城主の上田孫次郎実親(さねちか)も力尽きて切腹し落城する。

天正4年(1576)から鬼身城は毛利の勇将宍戸安芸守隆家が在番した。その後宍戸隆家の嫡子左衛門佐元秀(すけもとひで)の子息宍戸備前守元継が城主になり八万石を領した。慶長5年(1600)関が原の合戦後に廃城となっている。天

正3年(1575)に鬼身城を毛利氏が攻めた時に佐々部氏も参戦し功労があったので、宍戸安芸守隆家から、佐々部美作守家祐に宛てた文書血して残っている。鬼身(上田氏)被官己下分補仕候……と『萩藩閥閥録』の文書に、天正5年(1577)8月19日の日付が記されている資料です。

周匝の佐々部氏と安芸国の佐々部氏についての繋がりの方に、今一步調査する必要があると考えている。

現在のお城



茶臼山城の遠景(筆者撮影)

② 宇喜多氏の盛衰

宇喜多直家は天正7年(1579)佐々部勘斎貞利が居城する。周匝の茶臼山城を落城させて、次に飯岡の鷲山(わしやま)城の星賀藤内光重が討たれ、次に海田の鷹巢(たかす)城(現在の三咲町)の江見氏、次に美作の三星山城の後藤勝基も落城する。

県南の児島地区では天正9年(1581)4月に毛利氏と宇喜多氏と八浜合戦が起る。備前・備中・美作において合戦が行われている。天正5年頃から織田信長は西へ勢力を伸ばそうとしていた。西から毛利氏の勢力があり、信長は毛利と同盟にある西播磨の上月城(兵庫県作用郡上月)の赤松政範を討つことを決めて、総大将に羽柴秀吉を当て上月城の攻略に当たる。

天正10年(1582)毛利氏と織田信長の将羽柴秀吉との「備中高松の役」があり、その最中の6月

に本能寺の変があつて、秀吉は毛利との和睦を結び天正10年6月4日清水宗治の切腹を見届けて「中国大返し」をして、明智光秀を討つ山崎の合戦で勝利して天下人となる。

天正10年(1582)から16年後の慶長3年8月(1598)63才で秀吉が死去する。慶長5年(1600)9月関が原の合戦があつて、徳川家康が石田光成を討って徳川時代となる。備前国を支配していた宇喜多直家は天正9年(1581)に病死する。この時、息子の秀家は8歳で後を継ぐ。文禄・慶長の役に総督として出陣する。後の宇喜多秀家の所領は備前・美作・備中東半を合わせて5万7千4百石である。慶長3年5月、二回目の朝鮮出兵から帰国して豊臣家の五大家老に任命され重臣となったが、豊臣秀吉が慶長3年8月18日伏見城で死去する。その後関が原合戦で西軍側に属して敗北し、慶長11年(1606)4月八丈島へ流罪となり、50年を経て没する。

赤松・浦上・宇喜多氏と戦国時代の諸氏の栄枯盛衰を垣間見ることが出来る。

③ 備前池田氏の変遷について

宇喜多氏のあと遺領を継いだのが、筑前名島(現福岡市)の領主小早川秀秋で関が原の合戦で、論功行賞として、徳川家康から備前美作5万4千石の知行を給された。慶長5年(1600)備前国に入封したが、慶長7年(1602)10月に死去した。嗣子がいなくて断絶する。2ヵ年の在城である。

その跡に慶長8年(1603)2月備前国に28万石が姫路藩主池田輝政の二男忠継に、美作国に18万6千5百石が森忠正に与えられた。両氏は外様大名である。池田氏の由来については、遠祖は、鳥羽院の滝口武者で美濃国池田郡本郷村の出身であったから、池田右馬允と名乗り、その子孫は池田氏を姓とした。池田輝政の祖父恒利(つねとし)は江州滝川美作守貞勝の子息で、池田政秀の女婿となり將軍足利義晴に仕えてい

た。池田恒利の室は池田政秀の娘で法号を養徳院といい天文5年(1536)に織田信長の乳母となって厚遇された賢婦人であった。この中に生まれたのが池田信輝である。信輝は織田家を経て豊臣家につかえた。信輝の子息の池田輝政は徳川家康に仕えて、関が原の合戦にて並々ならぬ戦功を挙げて姫路52万石の給地を受けている。池田輝政は家康の次女富子と結婚して、池田忠継が生まれる。慶長18年(1613)1月25日、姫路の父輝政が死去し嫡男の利隆は姫路城に42万石の領主として帰る。

そして備前岡山に次男の忠継が配されたが、元和元年(1615)に17才の若さで死去する。その為に弟の忠雄が淡路から帰って城主となる。池田忠雄は岡山藩の中で御野郡南部の新田開発や邑久郡の神埼新堀の開鑿(かいさく)による千町川の治水、吉井川への田原井堰の築造、新田開発に尽力をしている。この殿様は小農民の農業経営が安定することを重視して、岡山藩政の基本造りを進めていたが、寛永9年(1632)5月21日病気で没す。この時点で忠雄の嗣子勝五郎(光仲)が3才の幼少であった為利隆の息子で鳥取藩主の池田光政との間で国替えの処置が取られ、光政は寛永9年(1632)7月16日に岡山城の受け取りを挙げる。その後、岡山藩主となった光政は政策として、国境および領内の重要な地域には家老及び侍大将等が配置される方針が取られ、備前と美作国の国境である赤坂郡周匝には2万2000石を給された池田家の老臣伊賀守長明の陣屋が設けられたのである。

④ 周匝(片桐)池田家について

初代は池田河内守長政で、池田紀伊守信輝の四男として天正3年(1575)に尾張犬山に生まれ9才にして片桐俊元の養子となる。故に片桐氏の称あり、慶長2年(1597)に片桐俊元の死去に及び参州新庄にて7000石を領する。その後慶長5年関が原の合戦にて上杉景勝を討ちて功あり、1万5000石を加増せられ、播州赤穂城主とな

る。慶長8年(1603)に池田輝政が備前を領するに及びその執政としてこれに従って下津井城に居住する。この時に1万石を加増せられ、3万2000石を領す。

その後下津井城の改修・江戸・駿府の築城に従事するが、慶長12年(1607)7月20日江戸から帰途の節に伊勢国庄野庄にて卒す。行年32才、遺骨は下津井の円福寺に埋葬され、銘石と御霊屋を建て廻向料として高9石4斗が寄進されたが寛文元年(1661)銘石は鳥取と周匝に移され、御霊屋は寺に払い下げて除去され、寺領もいつの頃か召上げられた。池田河内守長政の遺骨は円福寺の境内に納められているとされていたが、周匝池田氏9代の池田伊賀守長貞の時、天保8年(1837)9月家臣に命じて池田河内守長政の墓地を掘らせてみたら、下津井の円福寺にも周匝の墓地にも遺骨が無かったとのことであった。この事跡については、池田河内守長政公の法名は「大龍寺殿本岳常心大禅定門」と諡されている。大正元年11月1日発行の赤磐郡誌の中に記されている。

次に二代目池田伊賀守長明は、長政公の嫡男として慶長11年(1606)児島下津井城に生まれ母は荒尾美作守善次の娘である。翌年父の長政公が死去し、2歳にして家督を相続するが下津井城は西の要所にて幼年の在城は難しいとして、城付1万石を返上して播州佐用郡平福に移して、諸士をこの地に残し、伊予国大洲城主加藤嘉明の許に養われ、8才の時播州竜野に移る。この地に居り元和3年(1617)に池田光政は因伯(現鳥取県)に32万石を賜り、これに移り転封する。池田伊賀守長明は伯耆八幡に封じられ、池田光政は再び封を備前岡山藩に移されて備前藩主とな



2代目池田伊賀守長明の墓

り、池田伊賀守長明は寛永9年(1632)周匝にて2万2000石を賜る。その後延宝7年(1679)日大坂にて卒す。行年73歳、墓石は茶臼山の尾根上にあつて、俗に空の塚(空の塚)と今でも呼ばれている墓地にある。写真の正面には「備前州老池

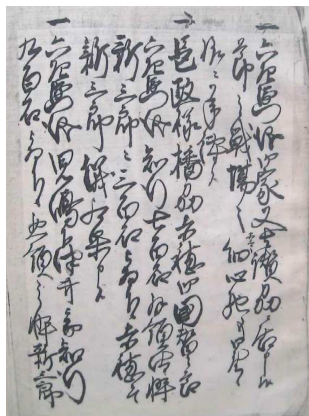


池田伊賀守長明の墓柱

田長明之墓」と刻んである。長明の法名は「高德院殿前伊州大守春峯景修大禅定門」とある。

⑤ 周匝池田藩士家臣先祖書上帳と那須家文書について

この資料は私が所有しているもので、周匝池田河内守長政の代から仕えた家臣の先祖奉公書上帳の記録で、重臣である波多野氏は長政公が慶長5年(1600)関が原の合戦に参戦した折に、波多野六左衛門が「御供仕候」の文面、慶長12年に駿河の城普請に行ったときに御供している



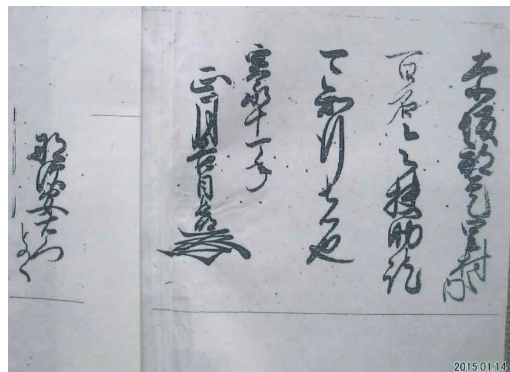
波多野氏先祖書(著者所有)

文面が見られ、延宝5年(1677)12月18日の日付で波田野与右衛門景任(花押)があつて、宛先を青木新右衛門殿としている。この波多野氏は

下津井城にて9百石の知行を受けている池田家の重臣で、周匝池田河内守長明から波多野六左衛門宛ての手紙文が残っています。

『周匝池田家藩士先祖奉公書』の中には伊藤氏・高木氏・大澤氏・片桐氏等の先祖奉公が記録され初代長政公、2代長明と家臣の動向を知ることのできる資料です。

江戸時代には大名が自分の家臣に知行地(所領)を与える代わりに、家臣からの奉公を受けて御恩と奉公の関係であつて、周匝池田氏は備前岡山藩の上級家臣である。また周匝池田氏も家臣に知行地を与えて御恩と奉公の立場をとっている。岡山大学所蔵池田家文庫に岡山藩池田氏の家臣の奉公書上帳が保管されている。この池田文書の中に、周匝池田氏の家臣の那須家先祖由来書上の資料があり、天正年中から明治2年までの那須家の代々の先祖の書上で、池田光政が因幡・伯耆に在封していた頃に、その地で百石の知行を賜っている。光政がその後、岡山に移封してから那須氏は周匝池田長明公に仕え二代目那須安右衛門休孝が長明公から赤坂郡是里村の内、百石を知行として賜っている。寛永11年(1634)正月の日付の文書がある。



那須安右衛門が受領の書簡(筆者所有)

もう1通は文政10年(1827)8月1日赤坂郡是里村の内百石を9代池田伊賀守長貞から、那須惣右衛門正倫宛に知行宛行状がある(吉井町史代2巻245~246頁)に記されています。この知行地の是里(これさと)村はわたしが生まれた場所です。

那須家の知行状で最古の文書は、岡山移封

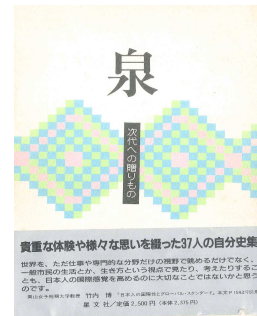
になる前の元和5年(1619)で池田伊賀守長明からの知行状で「伯州八橋郡之内、丸尾村ニ而百石令扶助何畢全可領地者也」との文書であり、那須家は周匝池田家の重臣として普請奉行、周匝町奉行、側用人などを歴任している。那須家先祖由緒書上の資料は、今から30年ぐらい前に父が健在のころ、横浜から周匝の池田家の家臣の子孫の那須正彦氏が自分の先祖を調査される為に赤磐郡周匝の教育委員会を訪れて父の紹介を受け、先祖の墓地へ案内する等の交流の中で、那須家先祖由緒書上の資料を持参された時に、本人了解の上で、コピーを戴いたものです。

今から16年前に私宛に一冊の本と手紙が添えられていた郵便物が届けられたので、開封して拝読させてもらった。本の題名は『泉一次代への贈りもの』(岡山編)と表紙に書かれていた。内容は各界で活躍されている岡山県人37名の方々による自分の人生体験などについて執筆された平成10年に発行された本で、この中に送って頂いた那須正彦氏が執筆されていました。テーマは「父祖の地を索(もと)めて」(吉井川上流のアルカディア)本の文面の中に自分の祖先の那須家の調査された時の色々な人達との出会い、自分の先祖の那須家文書が吉井町史の資料集の中に「那須正彦文書」として集録された時の喜び、私の父との出会い等について執筆されていた。

那須氏が先祖の調査にこられた頃、吉井町史が編纂されていた時期で、委員長に吉田晶先生、編纂委員で近世史専攻の倉地克直助教授(当時)その他の諸先生によって町史編纂が行われ、その頃、父も元気で専門調査委員として活動していた関係から、那須家墓地のことも知っていたので那須氏を墓地に案内した。その時に那須氏は先祖の墓石の前で暫く拝されて、いとおしく墓石を手で触れられていたのが印象に残っていると父が話したのを今でも覚えています。

その後平成3年3月吉井町史1~3巻が完成し父も町史編纂の協力者の一人として喜んでいました。その後平成6年12月25日父が没した。那須

正彦氏から送付して貰った本と、手紙は大切に保管している。その時の手紙の文面に「お父様の霊前にお供えいただければ幸いに存じます」と一筆書いてあり私は仏壇へ贈呈していただいた本と手紙を供え父に報告した。那須正彦氏からの一筆の手紙が大変嬉しかった。(下の写真)



那須正彦氏のピロフィール

昭和3年生まれ 昭和28年東大経済学部卒

昭和28年さくら銀行入行 平成5年明海大学経済学部教授 経済学博士 著書に『現代日本の金融構造』等

今年87歳になられる。今年頂いた年賀状にて元気にされている様子であった。

⑥ 下津井城の歴史と城主について

瀬戸内海に面した下津井湊の近くの小高い丘80mくらいの位置に下津井城は築かれている。備前児島と四国讃岐間の最も近い南北交通・東西交通への船での、物資の輸送等の要所である。特に航路が児島の南を通るために軍事上・経済上の重要視された場所である。

下津井城の歴史として天正から慶長5年頃までに宇喜多秀家が砦のようなものを築いていたとされている。宇喜多家は関が原の合戦で破れ、秀家は八丈島に流されそこで没す。秀家の次に小早川氏が入封し、下津井城代として平岡石見守頼勝が任命され入城して城の改築をするが、小早川が没して次に慶長8年(1603)池田信輝の四男の池田河内守長政が3万2000石で下津井城主として入る。

長政が本格的に下津井城に入るまでの間、家臣の岩田源介貞勝が采配して守っていたとされ、

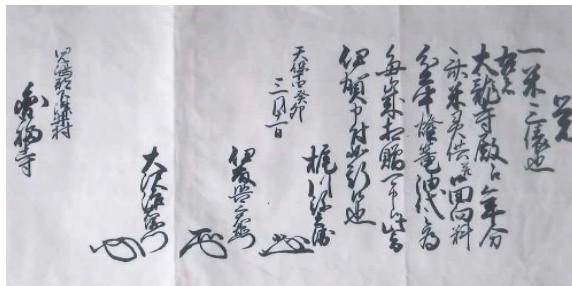
池田河内守長政は平岡石見守頼勝の下津井城の改修工事を受け継いで慶長11年に完成している。翌年の慶長12年に駿府城の普請に出役して病気になり帰る途中伊勢国庄野庄にて死去し、遺骨は児島円福寺の境内に埋葬されたとしている。没後の下津井城主には嫡男の新吉(池田伊賀守長明)とされたが幼少のために在城は無理とされ、池田由之(よしゆき)が播磨佐用城から下津井城に慶長14年(1609)2月に城主となり、その後荒尾但馬守成房が禄高1万石で入封して13年間在城する。

元和元年(1615)諸大名の軍備縮小に為に幕府は一国一城制を定められたので、寛永2年(1625)荒尾成房は隠居して子息の荒尾但馬守成利が城主となる。その後寛永9年(1632)に池田出羽守由之の子息が国替えによって着任する。

そして寛永16年(1639)城主出羽守は天城の陣屋へ移る(倉敷市藤戸町天城)所領は3万2000石、これより下津井城は廃城となる。徳川幕府の政策によって築かれた下津井城も、結果的に幕府の政策によって廃城になる皮肉なものである。

下津井城の文献資料は、児島の郷土史家、山本慶一・角田直一・大谷壽文・多和和彦・高木恭夫氏等の研究資料、文献があり今回参考文献とさせて戴いた。

⑦ 下津井円福寺と円福寺文書



円福寺へ池田河内守長政の供養料として送られた(覚)の文書

円福寺は潮音山円福寺福昌院、児島霊場34番札所で薬医門を入ると正面に本瓦葺き入母屋

造りの大きな本堂がある。内部には本尊の阿弥陀如来が観音、勢至の菩薩を従えて祀られている。文化7年(1810)下津井城山の西麓から移転したと伝えられ本堂の右脇にある観音堂には初代下津井城主池田河内守長政と下津井城で死去した2代目城主池田出羽守由之の室の供養の為に寛文10年(1670)に建てられたものです。円福寺は下津井城主の菩提寺である。円福寺の(覚)文書の中に周匝の池田家陣屋から円福寺に池田河内守長政の供養料として送られた文書が残っている。

文書の内容は「(覚)米三俵也右者大龍寺殿江年分齊米(ときまい)霊供、並御廻向料 盆中灯笼油代之為 毎歳相贈可申下此旨 伊賀申付如斯下也」天保 14年(1843)3月11日梶川弥兵衛伊藤与三右衛門好謙 大沢次右衛門 3名の連署、花押あり。周匝池田氏の家臣で延宝5年の年(1677)池藩士先祖奉公書上帳の中に見える諸氏である。この文書の伊賀申付……とあるのは、周匝池田氏9代の池田伊賀守長貞、35才の頃と考えられる文書です。

それともう一点、「上田三反、上畠二反此高9石4斗之分御寺領として御遣候素多年可遂候而取用者也」巳2月18日 岩田源介貞勝書判、下津井円福寺との文書です。岩田源介貞勝は下津井城に池田長政に仕えていた重臣である。

今回周匝の茶臼山城の戦国期における状況から始まって岡山藩の池田氏、周匝池田との関係、池田氏の家臣の動向を知ることが出来た。

諸氏の祖先の祖先奉公書き上げ帳の資料を通して藩主と家臣の関係、徳川幕府の政策の中で諸藩及び家臣達の歴史を観ることが出来た。

参考文献 日本城郭大系 吉井町史(2巻)

那須家史料 下津井城誌 岡山市史
和気郡誌 泉=那須正彦共著